80周年を迎えて思う事

伊藤 幹夫
(昭和46年建築科卒)

入会した2007年から毎月の東京ヒルトンホテルでの役員会は　激論、豪快な飲みっぷり、本物の秋田弁等、故郷秋田の思いに浸らせてくれるのに充分でした。あれから13年私が旅行会社をしていたこともあり、ゴルフ同好会の台湾大会、夫婦同伴でのハワイ旅行等。そして釣り同好会で行った横須賀からの、千葉からの、稲取からの、泊りがけの船釣り・・・等々。今まで得た楽しい秋工会の数々の思い出は、あらためて80年前からの大先輩の方々のご尽力の賜物と感謝しています。時代が変わり「ふるさとは遠きにありて思うもの」を耳にすることもなくなりました。望郷の念が希薄になっていくこれからの時代に「同窓会」の持つ意義、役割、の変貌をしっかりと確認しながらの運営が求められているように思います。昨年初めて首都圏の各県・地域毎に「金砂健児の集い」が開催され卒業以来母校のイベントは初めてという多くの卒業生が参加しました。東京秋工会にとって新しい一歩を踏み出したと思っています。80年の礎を築いてくださった諸先輩、そして長きにわたり東京秋工会を牽引され昨年度で会長を勇退された三平名誉会長のご尽力に敬意を表するとともに　これからは微力ながら佐々木新会長の下一致団結して100周年を見据えた新しい東京秋工会を次世代にしっかりと引き継ぎできるよう頑張って参る所存です。

会報 “KANASA” との28年

舩木 一美
(昭和48年機械科卒)

会報“KANASA”第1号の発行は1995年9月。当時の東京秋工会はあまり良い状況とは言えなかった。そんな中で会の活性化を目して考えられたのが同好会の設立(当初はゴルフ同好会のみ)と会報の発行。その実施役を任されたのが三平俊悦さん(S39A)と私(舩木)。仕事柄もあり会報は主に私の役割。

今でこそ編集ものなども本業の内ではあるが、当時は工業デザインと販促関連の企画・制作がメインで、類似のものを手掛けたことはあってもずばり会報となるとほぼ未経験。また会の諸事情もあって9号までは会報づくりのほとんどを一人でやらざるを得ず、毎号手探りの状態でこなした。

節目の10号を契機に会報のあり方や制作についての見直しがされ、加賀谷健治さん(S36E)を編集長とする編集委員会体制ができた。私事となるがこの頃は母の認知症や自営事務所の不調などが重なり、始めたらひと月以上掛かりっきりになる半ボラ仕事の会報制作は他の仕事との兼合いもあり正直しんどかった。そのため渋谷の事務所を締めるのを機に、心苦しくはあったが、14号で会報の制作と役員を降ろさせてもらった。

4年後新会長となった三平さんから、また“KANASA”をやってくれ、と連絡をいただいた。一度離れた身としては戻りにくい思いはあったが、離れていた間に冊子ものを手掛ける機会が多くあり、それで得たノウハウを活かせるかとも思った。

19号から復帰。モノクロもフルカラーもコスト的にほとんど差がなくなった印刷の現況もあり、20号から全頁フルカラーにすることとなった。

21号から嵯峨良平さん(S43E)が編集長になった。会報にはいわゆる報告書的なやや堅い方向性のものと雑誌的多様タイプの方向性があるが、“KANASA”はどちらかといえば元々後者に近く、全頁カラー化はその傾向をより強くしたように思える。

よく他校同窓会の人などから「“KANASA”はすごいね」と言われる。すごいものを作っているつもりまったくはないが、もう少し肩の力を抜いたような感じも必要だったかもしれない。

近年はSNS(FACEBOOK,Twitter等)の台頭で、紙媒体を作る意義は・・・というような話をよく聞く。あと2回で30号。若手にバトンタッチできる体制が出来ていないこと等々を思うとその先については全く検討がつかない。もしバトンタッチできる時が来たら、いろいろな面で思いっきりのある変化を望むものである。

東京秋工会と共に

奥山　恍
(昭和41工業化学科卒)

東京秋工会の同窓会から案内が突然に届いて驚いた。どうして住所がわかったのか不思議に思いながら取り敢えず出てみようと、会場の丸の内ホテル行った。当時私は東京プリンスホテルで営業部に所属し競合他社を見てみたいとの軽い気持ちでの参加でした。

総会とは名ばかりで会長の簡単な挨拶・名刺交換をメインにした立食パーティーであったので、参加者の名札の工業化学科を探していくそんな中、この年から会長になられた澤木誠一さん(S26E)が話しかけてきた。「料金をあげないと追出しになる」あなたの所で、6000円会費でできないか？と聞かれ、ノー天気な私は引き受けてしまう。(実際には丸の内ホテルよりは高く付く)受けてしまったからには何とかしなければならない。調理場を駆け回り頼み込んで5割増し位の料理を出してもらったが、2年目からはさすがに難しい。

折からのバブル景気で年会費3000円、総会費7000円に上げたらと澤木さんに伺ったところ了承して頂いた。平成4年金砂VOL.1までは年会費納入は100人未満であったが(会報KANASAを約800人に発送)、平成11年まで150人前後で平成12年発送部数1900にしたところ172人と大幅にアップ。平成17年以降には200人台と飛躍的に向上した。一方総会参加者はというと50人台を超えない、最低は平成11年の33人です。会費が高いとの意見もちらほら、自分のせいかなと思うこともあった。この頃は金曜日夜の開催であった。

平成14年金砂VOL.10のカラー化で総会参加者が初めて100人(来賓を含む)を突破し、多い年には約150人を数えた。

会報金砂も回を重ねるごとに役員会の意見を取り入れて内容が充実し、興味深い投稿がある。VOL.1～VOL.11までの笹渕茂さん(S21Y)の連載エッセイ・VOL.17～VOL.26までの地主勝己さん(S37C)の「私の秋田弁ライフ」・VOL.24～嵯峨良平さん(S43E)の「中国・台湾訪問記」等々楽しみにしているとの会員の声もあります。乞う“名文筆家”

私は、東京秋工会に参加し2年目から幹事になり、けやき会・秋高連のさまざまな行事に参加したおかげで多数の知古を得る事ができました。特に田口芳美さん(S43E)の誘いで、ハイキング同好会で知り得た山登りは“やみつき”になっております。これからの人生、人付き合いと山登りで楽しんでいきたいと思います。